



第2章 豊田市の森林の現在の姿

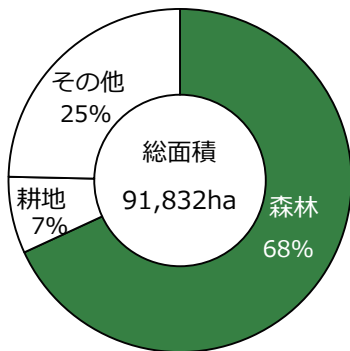
1 豊田市の森林

豊田市の面積は約92,000ha（愛知県内1位）と広大で、矢作川流域の約半分を占めます。このうち森林は、市域の約68%にあたる約63,000haを占め、また森林面積（国有林を除く）の約57%にあたる約35,000haが人工林、残りが広葉樹を中心とした天然林となっています。さらに人工林のうち、ヒノキ・スギの面積は約31,000haで、森林面積の約49%、人工林面積の約87%に上ります。なお、人工林のうち、植栽されたマツの多くは松くい虫の被害などにより減少し、天然林に変化しているものと推測されます。

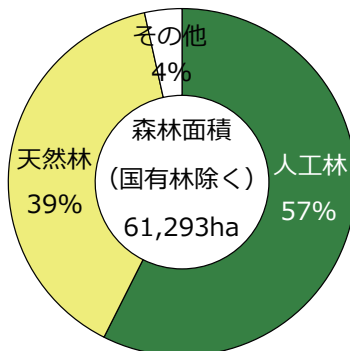


<矢作川と豊田市域>

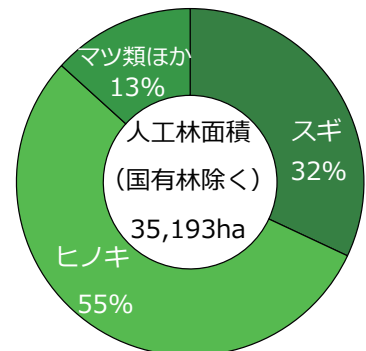
また、竹林はその利用が激減した結果、人工林や天然林に侵入してきています。



<豊田市の森林面積>



<豊田市の人工林率>



<豊田市の人工林の樹種別割合>

資料：愛知県林業統計（2016年度）

2 人工林の現状

人工林は、木材の収穫を目的に苗を植えてできた畑のようなもので、天然林とは異なり、下刈や間伐など、収穫まで管理を要します。しかし、市全域の人工林を対象に行った航空写真解析（2015～2016年度実施）では、約20%が適切な間伐が行われていない過密人工林（1,600本/ha以上）と判定されました。

過密人工林の多くは、林内の植生が極端に乏しくなり、地表がむき出しになっていて、水源かん養や土砂流出防止といった機能が著しく低下しています。このため、過密人工林が災害の発生源になることが懸念されており、人工林を適正に管理することを通じて、森林の持つ公益的機能を回復することが求められています（P.30参照）。

3 天然林の現状

天然林は、かつて薪や炭の原料、農業の肥料源などとして人々が手入れをしつつ活用してきましたが、利用価値が少なくなり放置されています。しかし、近年、都市部に近い里山林は都市住民の潤いや癒しの空間として見直されています。

なお、人の手が入らなくなった天然林は、植生遷移により徐々に変化していきます。

4 豊田市の森林資源

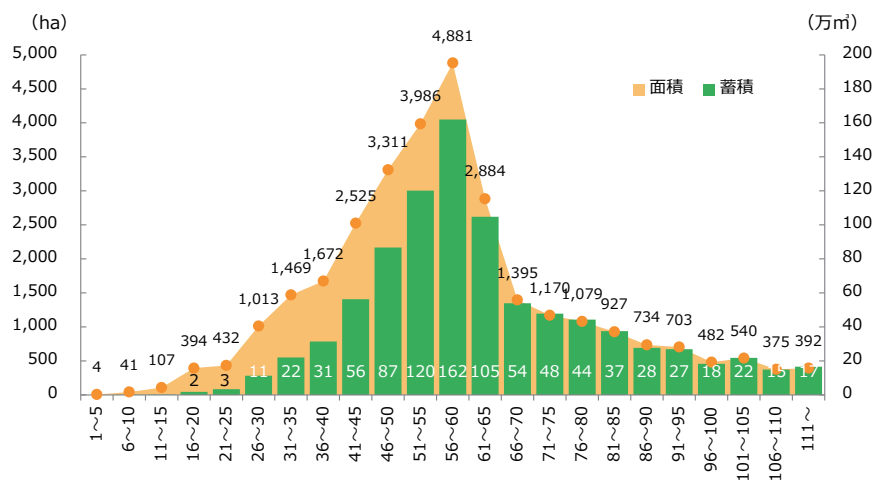
約31,000haに及ぶヒノキ・スギの人工林の多くは、戦後の拡大造林期に植えられたものです。半世紀以上経過した現在、これらの人工林は主伐が可能な時期を迎え、その木材資源量は、過去にないほど充実しています。また、71年生以上の高齢の森林も多く、木材資源として活用することが可能となっています。

5 東海豪雨の教訓

最近の集中豪雨は、地球温暖化の影響から熱帯型になっていると言われ、全国各地で大きな被害が多発しています。中でも土砂災害については間伐等の森林整備の遅れとの関連が取り沙汰されることが多くなってきています。

市においても、2000年9月11日に秋雨前線と台風14号の影響による集中豪雨（東海豪雨）にみまわれ、森林整備の重要性について見直すきっかけとなりました。

矢作川上流域の地質の大半は、深層まで風化の進んだ花崗岩類で、この地域では特に、土石流を伴った沢ぬけ、斜面崩壊といった土砂災害が多発し、県道や市道が寸断され、一時的に孤立状態になった集落が多数ありました。また、立木が根こそぎ流出するなどして、矢作ダム貯水池には約35,000m³もの木材が流入しました。



＜豊田市の人工林（ヒノキ・スギ）の年齢別面積・蓄積＞

資料：森林資源構成表（2016年度）



＜東海豪雨直後の豊田市中心街＞



＜矢作川上流域の山地崩壊＞